Exposure registry からのモニタリングシステムへの展開

信　友　浩　一
（国鉄中央保健管理所）

1. 現行モニタリングの問題点—要因解析の面から—

発生要因解析は，当然のことながら発生要因に関する情報の収集から始まる。わが国では当該症例が発見された時点からそのような情報が収集され始めるので次のような問題が必然的に生じる。

1) Systemic error の出現

① Selection bias

発生する全先天異常例が当該モニタリングシステムへ報告あるいはスクリーニングされるかたちにはなっていない。従って特定のサブグループのみが報告されている可能性があり，個人特性他の要因分布に関し特定化されそのことによるみせかけの発生要因がでてきうる。あるいは真の発生要因が存在しながらそれを有する症例がより少なく報告されるために検出できないこともある。

② Information bias

通常，発生要因に関する情報は，当該症例の母親から得ている。すなわち発生時点から過去に逆のぼる情報（記憶）を気の動転している母親からとることによる情報の偏りを併なっていることである。多くの実例，例えば妊娠中のレントゲン照射歴，が報告されており，これが記憶にもとづく情報の，正確性に関する最大の欠点である。

③ Confounding factor

上記した二つの bias が解消（研究計画作成時で可能）できたとしても，大量の情報がとれないためみかけの要因がひっかかり易くなり，あるいは真の要因をみのがしやすくなる。前者に関してはみかけの要因の真の原因（Confounding factor）に関する情報をえることで解決できる。

2) Privacy の壁

先天異常が100%治癒できる傷病であれば，それに関する情報を患児の両親は喜んで提供するであろう。また，わが国の文化のベースが「恥」をベースにしてることから，さらに当該情報の収集を困難にさせている。コミュニティベースの生活がほとんど根づいていない社会では，集団主義はあっても合理主義は育たない。

2. 今後のモニタリングのための一解決試案

コミュニティ意識がすでに存在し，発生時点前から健康に関する情報が系統的かつ経時的に収集・保管されていれば上記した問題点は解決できるであろう。

1) コミュニティ意識の存在

土地を介してのものは単に「ムラ」意識をつくるだけで，合理性に欠ける。その点「働く場」というコミュニティは，常にコミュニティ意識が存在し，経営者には生産性の点から，労働者には働きがいの点から，維持される。

2) 健康情報システム

1) で述べたようなことから，両者には共通する健康に関する位置づけがある。それ故，健康に関する情報はプライバシーに触れるところまで収集・保管・Linkage することが，もし両者から信頼されている医師であれば許される。

3) 国　鉄

上記した1) と2) の条件を満足している，あるいはしつつあるコミュニティとして国鉄が考えられる。かつ出産は年間一万人台と，数の点からみても充分であろう。

3. 本年度の成果

健康情報システムの必要性，とくに Linkage 概念を，既存情報から実績をつくることで理解してもらうことができた。さらに既存情報システム・ネットワークの活用という点からの検討もスタートできた。